正倉院年報

一、古裂の整理

昭和四十一年度においては、前年に引続き中倉に所属する第七十一号横以下十合に残存する綾繡絹絁類断爛塵芥の整理ならびに南倉所属の楽服および幡類の展開整理を行なつた。その結果は次のとおりである。

一、綾繡絹絁類塵芥

刺繡残片　六百十三片
屏風縁裂残片夾纈　三十九片
雑色組帯残片　三十二片

右残片は玻璃板夾三十二枚第二三二号―第二六三号に装した。刺繡残片中には天寿国曼荼羅繡帳残片二十数片、法隆寺に伝わる繡仏の残片と考えられるもの百五十数片が含まれている。

古裂帖　四十冊第六七五号―第七一四号

綾類三千七百二十四片、夾纈絁類千八百八十片、絹絁類二千六百四十二片、刺繡残片七百十二片計九千五十八片を分貼した。中でも夾纈絁中には、献物帳所載の鹿草木夾纈屏風画面残片が過半を占め、これらは屏風残破の結果細片となつたものである。

二、楽服及び幡類

大歌布襪　一隻
墨書　東大寺大歌　天平勝宝四年四月九日、朱方印文云、東寺綱印

唐古楽武王襪　一隻　緋絁、白絁裏
墨書　東大寺武王襪　天平勝宝四年四月九日

同　破陣楽襪　一隻　緋絁、白絁裏
墨書　東大寺破陳楽襪　天平勝宝四年四月九日

同　安君子半臂残闕　緑地錦、緋絁裏、浅縹絁襴
墨書　古楽安君子

同　横笛半臂　一領　緋絁、生絁裏、蕨纈絁襴
墨書　東寺唐古楽横笛半臂　天平勝宝四年四月九日

同　布襪　一隻　深形、錦縁、白絁裏
墨書　東大寺唐古楽□襪、膳

唐中楽琵琶袍残闕　白絁単
墨書　東寺唐中楽琵笆袍　天平勝宝四年四月九日

同　琵琶半臂　一領　緋絁、生絁裏、黄綾襴

墨書　東寺唐中楽筜笆半臂、天平勝宝四年四月九日

唐散楽女儛半臂　一領　黄地錦、紅絁裏、黄羅襴

墨書　東□□唐散楽女儛半臂、天平勝宝四年四月九日

同　渾脱襪　二隻　緋絁、布裏

各墨書　東大寺渾脱　天平勝宝四年四月九日

同　渾脱襪　一隻　緋絁、生絁裏

墨書　東□□渾□襪　天平勝宝四年四月九日

狛楽楽頭襖子残闕　褐色繧繝絁単

墨書　□寺狛楽□頭単　襖子　天平勝宝四年四月九日

同　楽頭半臂残闕　錦、黄絁裏

墨書　東寺狛楽々頭、天平勝宝四□□□

同　拍子袍残闕　白橡絁単

墨書　東寺狛楽拍子袍　天平勝宝四年四月九日

同　弄禿衫　一領　白絁

墨書　東寺狛楽弄禿汗衫　天平勝宝四年四月九日

同　桙取襪　一隻　緋絁、白絁裏

墨書　東寺狛楽桙　天平勝宝四年四月九日

同　鼓撃襪　一隻　深形、布、錦縁、白絁裏

墨書　東大寺狛楽皷撃　天平勝宝四年四月九日

度羅楽婆理襪　三隻　緋絁、布裏

各墨書　東大寺波理

同　久太襪　五隻

三隻　緋絁、布裏、墨書、東大寺久太　天平勝宝四年四月九日

一隻　緋絁、布裏、墨書、東大寺度羅楽久太　天平勝宝四年四月九日

一隻　緋絁、生絁裏、墨書、東大寺久太　天平勝宝四年四月九日

呉楽崑崙襪　一隻　緋絁袷

墨書　東大寺　天平勝宝四年四月九日　前一崑崙、迦楼羅

同　襪　一隻　緋絁袷

墨書　東大寺後一崑崙　天平勝宝四年四月九日

呉楽金剛襪　一隻　緋絁、白絁裏

墨書　東大寺前二金剛

同　襪　一隻　緋絁、白絁裏

墨書　東大寺後一金剛　天平勝宝四年四月九日

呉楽力士桙取襪　一隻　緋絁袷

墨書　東大寺前一金剛力士桙持　天平勝宝四年四月九日

同　襪　一隻　緋絁袷

墨書　東大寺前一力士桦取　天平勝宝四年四月□□

呉楽師子児襪　一隻　緋絁、白絁裏

墨書　東大寺後二師子児、天平勝宝四年四月九日

同　襪　一隻　緋絁、白絁裏

墨書　□□師子児　□宝四年四月九日

呉楽呉公襪　一隻　紫地錦、生絁裏

墨書　東大寺後二呉公

呉楽太孤児襪　一隻　緋絁、白絁裏

墨書　東大寺前一太孤子　天平勝宝四年四月九日

同　襪　一隻　緋絁、白絁裏

墨書　東大寺後二太孤子、勝宝四年四月九日、前太孤子

呉楽婆羅門襪　二隻　緋絁、布裏

各墨書　東大寺後二婆羅門、天平勝宝四年四月九日

呉楽治道襪　二隻　緋絁、生絁裏

一隻　墨書、東大寺□治道襪　天平勝宝四年四月九日

一隻　墨書、東大寺前一治道襪　天平勝宝四□□九日

呉楽庇持襪　一隻　紅絁、生絁裏

墨書　東大寺庇持

呉楽鼓撃襪　一隻　紫地錦、白絁裏

墨書　前□鼓撃　東大寺　天平勝宝四年四月九日

同　襪　一両　緑地錦、布裏

一隻墨書、鼓打

同　襪　一隻　紫地錦、生絁裏

墨書　前一鼓撃襪　東寺　天平勝宝四年四月九日

同　襪　一隻　紫地錦、生絁裏

墨書　後鼓撃襪　東大寺

同　襪　一隻　錦、生絁裏

墨書　東　後一鼓撃襪　天平勝宝四年四月九日

呉楽白絁脛裳　一隻　錦縁、白絁裏

墨書　呉楽後二　天平勝宝四年四月九日

呉楽錦襪　一隻　布裏

墨書　東大寺後□　天平勝□

同　襪　一隻　生絁裏

墨書　東大寺前二□　天平勝宝四年□

雑楽半臂　一領　赤地錦、黄絁裏、黄羅襴
墨書　東大寺雑楽半臂

雑楽半臂残闕　黄地錦、赤地錦袖、夾纈絁襴
墨書　東大寺雑楽半臂

雑楽半臂　一領　夾纈羅、黄絁裏、黄羅襴
墨書　東大寺雑楽半臂

雑楽半臂残闕　白橡地錦、生絁裏、黄羅襴
墨書　東大寺雑楽

同　残闕　白橡地錦単、夾纈羅襴
墨書　東大寺雑楽

赤地錦半臂　一領　黄絁裏、紫絁襴

緑地錦半臂残闕　緋絁裏、黄絁襴僅存

同　残闕　白絁裏、袖及胸赤地錦、紫綾襴僅存
墨書　東大寺

黄地錦半臂残闕　白絁裏、紫地錦裾

緑地錦半臂残闕　白絁裏、緑目交纈絁襴

紫綾半臂残闕　白絁裏

黄綾半臂残闕　黄絁裏

赤絁半臂残闕　生絁裏

夾纈絁半臂残闕　白絁裏、赤地蔦纈絁襴
墨書　東大寺造寺所

同　残闕　白絁裏、赤地蔦纈絁襴

錦幡残闕　一旒

同　一旒　題箋文、□上天皇□道場幡

同　一旒同　、平城宮、天平勝宝九歳□二日

右錦幡はいずれも聖武天皇御一周忌斎会道場幡である。

二、宝物の修理

本年度において宝物の修理を終えたものは次のとおりである。

一、馬　鞍　第七号　（中倉）

鞍橋、鞍褥、韉、厩脊、鐙、銜等は具備するも三懸、手綱を逸する。鞍橋は両輪は牟久木、四枚居木は樫を用いている。後輪にのみ見られる鞍は平絎の黒革である。韉は表を黒漆の鮫革とし、輪廓内に二重の

町形文を押す。裏は漆溜塗の生皮、心に麻布・薗筵・木葉・薗筵・麻布を重ね細布にて裏む。屏脊の表は白絁、雲竜文を表わした広幅の熏革で縁取りし、裏に細布を張る。鐙は鉄製黒漆塗の壺鐙に平絎の革鞦をかけ鉄製鈸具で力革に連ねる。鐙鞦の責金具と端金具は金銅製、銜は鉄製黒漆塗の茨莉銜、面懸を逸している。

一、金銀絵漆皮八角鏡箱　一合　（北倉）

被せ蓋造、黒漆塗、蓋表と身外側に金銀泥で宝相華文を描いてある。漆皮箱特有のいわゆるクモ手断文が所々に見られる。嚙は白絁、仮に北倉平螺鈿背八角鏡（第十三号）の箱に充ててある。

一、密陀絵皮箱　第六号　　一合　（中倉）

面取被せ蓋造、素地の皮に外部は布を張り全面に漆を塗り、銀泥で唐花唐草文を描き油を塗る。銀泥絵は油のため鮮やかな赤色を呈している。内部は漆地に丹を塗り油をひいた上に銀泥で七曜文を散らす。

一、密陀彩絵箱　第十三号　一合　（中倉）

木製黒漆塗印籠蓋造の箱で正面には金銅の海老錠を着け、背面には一双の金銅壺金具と肘金具とを設けて蝶番鈸具とする。外面は彩絵で円形、菱形二種の唐花文を描き全体に油を引いたものである。

一、漆皮箱　雙六子箱　一合　（北倉）

一、金銅鈿荘唐大刀　第五号　一口　（中倉）

一、黒作横刀　第八号　一口　（同　）

一、黒作大刀　第十三号―第十六号、第廿一号、第廿四号六口（同　）

右刀剣類の漆鞘

一、漆小几　一枚　（中倉）

一、漆合子　第七号、第八号　二合　（同　）

一、漆柄麈尾　一枚　（南倉）

一、呉竹笙　柒膝壺　一口　（同　）

一、漆皮箱残闕　二隻　（同　）

以上いずれも原状を損しない程度の維持修理を行なつた。

三、刀剣類の研磨

刀剣類の研磨は昨年度を以て第一次計画は完了したが、さらに精査の結果微錆あるいは著しく「ヒケ」が生じ肌荒れのものがあるので、第二次研磨計画を立て本年度より実施することとした。本年度において研磨を了したものは次のとおりである。

一、黒作大刀第十三号　一口　（中倉）

一、鉾　第十四号　一口　（同　）

一、黄楊木把鞘刀子　一雙　（同　）

四、経巻の修理

聖語蔵経巻の修理は前年に引続き乙種写経五十巻を完了した。すなわち次のとおりである。

一、乙種写経　第四七号　仏説普曜経　三巻　巻一、三、八、

一、同　第四八号　阿毘曇五法行経　一巻
一、同　第四九号　成唯識宝生論　三巻　巻二、三、五
一、同　第五〇号　阿毘達磨大毘婆沙論　四十三巻　巻一、二、四、五、六、八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一六、一九、二〇(甲)二〇(乙)二一、二二(甲)二二(乙)二六、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五二、五三

右経巻はおおむね鎌倉時代の書写にかかり、紙背に応々梵字、宝塔、東大寺正蔵院等の黒印が捺してある。いずれも虫損が多くまた襟軸の逸失するものがある。それぞれ旧態を損せないよう修理し、その襟あるいは軸の欠失するものは古様に似して新補した。

五、宝物の特別調査

(イ)伎楽面調査

昨年度より実施の伎楽面調査は引続き本年も行なわれた。本年度においては木彫面第六十一号より百三十五号に至る七十五面の調査を了した。特に本年度からは実測図作成のため等高線写真撮影を行なつた。調査は奈良国立文化財研究所長文学博士小林剛、京都国立博物館美術室長文学博士毛利久、元奈良学芸大学教授長屋謙三の三氏、等高線写真撮影指導は東京大学教授工学博士丸安隆和氏に依嘱して行なわれた。

(ロ)刀身調査

正倉院に伝世する刀剣類は大刀五十五口、手鉾五口、鉾三十三枚、刀子七十余口にして、上古刀研究には絶好の資料というべきである。これ等刀剣類の形態、地鉄、鍛法、作風等を調査して平安以降に完成した日本刀の作技の源流を明らかにせんとするものである。調査は文学博士本間順治、東京国立博物館工芸課長文学博士佐藤貫一の両氏に依嘱し、また科学的調査には岩崎航介氏に依嘱して実施した。